巻頭特集

「ラグビータウン熊谷」アップデート 2017秋

本誌昨年3月号「『3年前』のラグビータウン熊谷」から1年半。それぞれの取組みもアップデートされている。そんな2017年秋のあれこれを、関係者のコメントとともにまとめた。

大久保　和政 氏
吉見商事株式会社　代表取締役社長
熊谷商工会議所　副会頭
協同組合 熊谷流通センター　理事長
アルカス熊谷は創立からずっとサポートしている

アフターナイツは「応援に行こう」にバージョンアップ！

まずフィールド上。いちばんの話題は、トップリーグ「パナソニックワイルドナイツ」の公式戦6試合熊谷開催だろう。

W杯を想定して、会場運営からチケットの販売までを地域レベルで実施。トップリーグ公式戦では、全国初の試みという[1]。

2010以降トップリーグ優勝4回の強豪ワイルドナイツは、熊谷ラグビー場から約1キロの群馬県太田市が練習拠点[2]。同クラブは、W杯前に完成する熊谷ラグビー場への本拠地移転を検討しているが、さらに構想は大きく南半球のスーパーラグビー[3]への参戦が視野にあるという。

ワイルドナイツ戦でまちを盛り上げようというのが、「灼熱決戦の後は熊谷で乾杯！ ラグビークマガヤアフターナイツ」。国内大手ビール4社の埼玉支社とコカ・コーラの協賛を得て、観戦すると参加飲食店でビールやソフトドリンクが1杯無料になる[4]。

実行委員長大久保和政さんは、アルカス熊谷の同NPOの副理事長で「設立の立役者」[5]。商工会議所副会頭でもある大久保さんはこう語る。

「まちの中に、W杯に向けた仕組づくりが必要です。熊谷史上最高のビッグイベントにみんな関わりたいんだけど、仕組がないからどうしたらいいかわからない。実はそういう人が多いんです。

ラグビータウン構想は、さいたま博の跡地をラグビー場に、という市民運動から産まれました。その目的は熊谷のまちの活性化、元気になることだったのではないでしょうか」

アフターナイツ第2弾は、「飲んで食べてパナソニックワイルドナイツを応援に行こうキャンペーン」。参加店で5,000円以上飲食した方に、「ワイルドナイツ戦 観戦ペアチケットの無料引換券」がプレゼントされる。

「アフターナイツは、熊谷のまちと熊谷だけでない産業界からのラグビーとW杯への声援です」（大久保さん）

アフターナイツの参加店はさまざま。たとえばスポーツ文化公園近くに今年オープンした「花湯スパリゾート」内飲食店でも、観戦帰りに家族でビールやソフトドリンクを楽しむ姿がよく見られたという。バイパス近くの“スタジアム城下町”もあと2年の期待だ。

グルメ、アトラクションイベントでモチベーションアップ！

W杯会場のスポーツ文化公園ではこの秋、さまざまな関連イベントが開かれている。

名物かき氷「雪くま」6店の出店があった9月3日の「第24回熊谷市ラグビーまつり」、小学生以下をターゲットに体験型テーマパークを構築した10月7日の「ラグビーキッズパーク@くまがや」、524名の参加でギネスブックに認定された「最大のラグビー教室」が行われた10月21日「開催と2年前イベント」と、練りに練ったコンテンツ連発だ。

夫の転勤で深谷市に移って2年目、1歳児ママ米元七海さんは、9月のラグビーまつりに参加した。

好天で暑かった9月3日に行われた「熊谷市ラグビーまつり」。ラグビーだけでなく他アイテムとのコラボレーションは、前号でインタビューの公園フタッフ松井さんもすすめていた

「出身の茨城県北はあまりラグビーはさかんでなかったのですべてが新鮮です。わたし自身はスポーツに疎いのですが、雪くまのようなグルメといっしょだとモチベーションが上がりますね」

学校、企業…タグラグビーはスケールアップ！

こうしたラグビーイベントの主催は、県協会、市協会、商工会議所、同公園とさまざま。いくつかのイベントの事務局的な動きを担当する社会人のラグビークラブ「RFC熊谷」は、タックルがなく親しみやすいタグラグビー教室※6など多彩な取組を展開する。

同クラブの新井孝一さんは、複数のイベント運営も担当。

「会場の整備のようなハード面は行政の仕事。われわれは、ラグビーのソフト面の普及を地道に続けるのが役目と思ってます」

タグラグビーは、女子7人制の「アルカス熊谷」が熊谷市と協働で行う小学校などでの教室もあって急速に普及。今年度の市内大会に小学生の部67チーム420名が参加したほか、走っちゃいけない（競歩のようなスタイル）の「埼玉県企業&事業所対抗　ウォーキングタグラグビー大会」が来年1月21日を第1回に、今後半年ごとの開催でW杯機運を高めていくという。

新井さんは熊谷東中から、深谷高校と、埼玉県北ラグビー畑で育ってきた。RFCでのタグラグビー普及活動、自身のキャリアをもとに、「ラグビーチームのような」「一丸で働く職場づくり」を企業などに提案する株式会社Wara-i兄弟社を起業した。

「ラグビーで学んだことを社会に返していく。W杯開催がいいきっかけになるといいですね。ほか、グローバル教育のNPO『AEA』との協働で、英語でのタグラグビーも準備中です」

“いままであったもの”がバリューアップ！

W杯をチャンスとして自分たちの仕事に活かしていく！そんな各自の取組が増えていくことが理想だろう。それはWara-i兄弟社のように埼玉県北に多く生息するラグビーピープルだけでなく、“ラグビーから遠い人たち”を巻き込んでこそ効果がある。

● 大里行政センター東、おおさと工房「農村レストラン」が8月に発売した新商品は、Hボールからもっとも遠いところから放たれたすばらしいゴールキックだ。

ロングセラーの田舎饅頭をバリューアップ。ボールを模した新商品「ワン・フォー・オール、オーサト・フォー・マン（じゅう）」開発となった。

「W杯が熊谷で開催されることを知り、『ふるさと熊谷』を盛り上げようと、評判のいい田舎饅頭をこのかたちにしました。

黒糖の饅頭生地が昔のラグビーボールの色に似ていて、これはいけると思いましたね。人気の高菜は成型できなかったので断念。今後の課題です。」

焼き印を制作した商品はできたもののセールスに悩み、関係者を経てまちづくりのNPOくまがやに相談。同法人が指定管理する市民活動支援センタースタッフの立正大学生長谷川樹生さんがメインを務めるトークイベント「ガヤガヤくまが夜」での意見交換でネーミング、デザインが決まった。

● 同工房の会長・橋本時子さんはいう。

「おばさんたちが一生懸命作った饅頭をぜひご賞味ください。余談ですが、いっしょにまんじゅうをつくる仲間も募集しています」

「奪い合う美味さ！」がキャッチコピーの「ワン・フォー・オール、オーサト・フォーマン（じゅう）」は大里農産物直売所、八木橋で販売中

ラグビー場は収容人員増のため改修中だし、熊谷市のマスコットニャオざねも「ラガーニャン」にバージョンアップした。しかし「ラグビータウン」は、県や市といったビッグプレイヤー、ラグビー関係者だけでは築けない。子育てママ、地域のおばちゃんのような、これまでラグビーに縁のなかった人々を巻き込んでこそ、スクラム、タックル、パス、ラン、キックを効果的にまじえた、多彩で魅力的な“熊谷ラグビー”になる。おおさと工房のような、“いままであったもの”のリニューアルで十分なサポートだ。

2019年W杯で3試合行われる1ゲームはそれぞれ80分。われら熊谷の持ち時間は2年、約50万分しかない。まずは、ラグビー場に行って観戦をすることから始めよう。

※1　東京新聞8月16日付県担当者のコメントより
※2　パナソニック・ワイルドナイツの前身は埼玉県北出身者が多く「野武士軍団」と呼ばれた三洋電機。なお、ワイルドナイツの「ナイツ」は「夜」でなく「騎士」
※3　ニュージーランド・オーストラリア・南アフリカ共和国・アルゼンチン・日本の5か国、計15のクラブチームの国際リーグ戦
※4　酒類販売店を利用したシステム。飲食店での利用数に応じてメーカーから料金が支払われるという
※5　「アルカス熊谷」はラグビータウン、女子セブンス、立正大学といったさまざまなカードを組み合せてまちを盛り上げようとNPOを設立した